

Raffiné Journal vol.28

涙と泪

涙と泪は、同じ水ではない。

一方は感情の形で、
もう一方は理由の前に滲む湿度。

人の内側には、
名前が与えられる前の揺れがある。

涙には名前がある。

悲しい涙、嬉しい涙、悔しい涙。
誰もが知っている、理由のついた水。

けれど、私の中にはもうひとつ、
理由の前にふっと溢れる水があった。

心がほんのわずかに揺れたとき、
説明できない湿度が
胸の奥から静かに上がってくる。

その瞬間に落ちるのは、
涙とは少し違う水だった。

あるステージで、
ひとりの音楽家が歌っていた。

その曲は、
もう何度も聴いてきた曲だった。

歌詞も、旋律も、
すべて知っているはずなのに、
その夜は少し違っていた。

歌い手は、
感情を語っているわけではない。

むしろ、
感情がまだ形になる前の層に
声が触れている。

それでも、
声の温度だけが
静かにこちらに届く。

その瞬間、
胸の奥に
ほんのわずかな湿度が生まれた。

似た感覚は、
写真を見ているときにも起きる。

強い物語があるわけでも、
劇的な瞬間が写っているわけでもない。

ただ光が置かれているだけの、
静かな一枚。

そこには、
意味や物語になる前の状態が
そのまま残っている。

その写真の前で、
胸の奥に
ほんの少し湿度が生まれる。

それは、
感情の名前を待たない水だった。

思えば、
その感覚は子どもの頃からあった。

理由を聞かれても、
うまく答えられない。

ただ、
何かほんの少しだけ動き、
そのあとに水が来る。

大人になってから知った。

その水には、
すでに名前があった。

「泪」

涙は、感情の形である。

悲しみや喜びが
言葉として並んだあとに
水になる。

けれど泪は、
その手前で生まれる。

まだ名前のつかない揺れが
内側でわずかに動き、
その気配だけが水になる。

理由よりも前に、
人の内側には
説明できない湿度がある。

そして表現に触れたとき、
その層が
揺れることがある。



あとから、理由が来る ——

Raffiné Journal vol.28
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné